

朝鮮仏教と平和思想

許 油

序論

韓国仏教の歴史的な過程で朝鮮時代の仏教は、新羅・高麗時代とは著しく対比される、新しい転換期をもたらした。それは、朝鮮の仏教が前代の仏教とは大きく異なる時代的な条件と状況の中で、活路を模索する過程で現れる。

朝鮮の統治理念は儒教受容を標榜する崇儒排仏政策が核心である。こうした崇儒排仏政策は、朝鮮王朝が滅びるまで5世紀間にわたって続いてきたが、この期間は朝鮮の仏教にとって厳しい弾圧と受難の歴史であったと規定される。朝鮮の排仏政策によって僧侶の数を制限し、統制するための度牒制(新たに僧尼になったものに政府から渡した免許証)が実施され、寺田にも税金が課され、僧侶の都城内の出入り禁止とともに僧科が廃止された。また、僧侶を俗世に還し、尼は管奴にすることもあった。こうした朝鮮王朝の排仏政策は、仏教の存在そのものを脅かすほどで、韓国仏教の歴史上、類例のない暗黒の時期であった。これは、朝鮮王朝が性理学的な理念を新しい統治理念として定着させるための戦略的な側面とともに、膨大な寺院の土地を国有化し、国家財政の確保という側面も強い。

しかし、こうした時代環境の中でも朝鮮の仏教は新たに自らを救う努力を傾け、復興を試み、最後までその脈をつなごうと努力し、仏経の出版を通して民衆教化事業も持続させてきた。

朝鮮の仏教の時期は、朝鮮の太祖元年(1392年)から始まり、大韓帝国の高宗34年(1897年)までの505年間である。この期間中の仏教の特徴は、国家との従属関係が清算され、都城を離れた山中仏教化の時代であると言える。朝鮮の仏教を時代別の特徴によって区分すると、以下のように3つに分けることができる。

1. 両宗と僧科の存立期
2. 山僧家統の確立期
3. 三門(看経・参禅・念仏の授業)と二事判僧(勉強する僧侶と労務だけを担当する僧)

の存続期

このように朝鮮の仏教は崇儒排仏政策によって山中僧団といった独特な仏教文化が発展するようになった。それは、今までの仏教のように王権の神聖化や国家祈福と政治的利害による民衆の統治手段としてではなく、民衆の教化と貧民の救済、および土着信仰との調和を通じた仏教の大衆化にある。したがって、朝鮮の仏教は排仏の受難の中で沈滞と衰退を繰り返したのではなく、山中僧団を通して別の発展を模索していたという観点から朝鮮の仏教を見る必要がある。

1. 山中僧団の出現と形成期

朝鮮時代の仏教の特徴は、既存の国家従属概念であった僧科⁽¹⁾、僧職および国師、王師制度が完全になくなり、都城内での活動が禁止されるにつれ、山奥に退くようになったことである。これは朝鮮の仏教が山中仏教化の形で国家から独立するきっかけとなった。

時期別の排仏政策の形態と山中僧団の形成過程とを簡略に調べてみると、朝鮮開国当時、排仏政策の論争にもかかわらず、太祖（1392-1398年）の時は仏教教団に特別な変化は見られなかったが、太宗（1400-1418年）になってはじめて本格的な仏教抑圧政策が現れる。⁽²⁾

太宗の代表的な排仏政策は大きく5つに分けることができる。

- 第一、宗派、寺院数の減縮およびその土地と奴婢の没収
- 第二、王師・国師制度の廃止
- 第三、度牒法の強化
- 第四、創寺・造仏・設会などの経費消耗が大きい仏事の禁止
- 第五、陵寺制度の廃止

こうした広範囲な排仏政策は国家統治理念だけでなく、太宗の軍事力の維持のための財政確保という理由から始まった面も少なくない。何よりも、寺院の土地の減縮と奴婢の属公などの主な排仏政策の内容が主に仏教に対する経済的な制裁の形で現れるからである。

太宗の排仏政策で、11宗に達していた宗派が7宗に廃合・縮小された。世宗の時はこれがまた禅と教の両宗で統廃合され、仏教の経済的・人的な基盤は相当の部分が解体され、教学思想とその活動の多様性もほとんど見られなくなり、山中僧団をもたらしきっかけとなった。

成宗（1469-1494年）に至っては、王権の安定と儒教の理想政治を実現するために、仏教に排他的な新進士林の勢力を大勢登用し、仏教排斥の度合いを強めており、持続的な追い出しと度牒法の停止は成宗時の抑仏政策の核心をなしている。特に、士林が勢力を得ることと、仏教の受難は直接関係しており、これが山中僧団の出現の背景の一つともなったの

である。

仏教に対する抑圧の絶頂は燕山君(1494-1506年)時代の10年余間の暴政期間であった。この時期に燕山君は、禅宗本寺の興天寺と教宗本寺の興徳寺を廃止、すべてを妓樂とした。都城内の尼寺を壊し、尼僧は宮房の婢とし、僧侶は還俗させ、官奴にするなど、燕山君の破仏行為で都城における仏教の根拠地はほとんど破壊され、これは仏教が山中に入らざるを得なくなった主なきっかけとなった。⁽³⁾

このように、山中僧団の時代は事実上、燕山君末期から始まり、それは再び中宗(1506-1544年)の時代に廃仏政策として取り返しのつかない現実として固まっていった。中宗は興天寺と興徳寺の大鐘と、慶州の銅仏で銃筒を鑄造させ、経国大典から度僧法を完全に削除させることにより、燕山君以来中断された僧科を完全に廃止した。

これで、仏教教団は無宗派の山中僧団として存在せざるを得なくなり、これはその後、朝鮮の仏教が新羅と高麗の仏教とは異なり、山中僧団といった朝鮮の仏教の在り方を決める要因となった。

こうした朝鮮前期の抑仏政策は、朝鮮の仏教が国家から独立し、自立せざるを得ない新しい課題を生み出したが、これを大きく5つに分けると、

第一、法統守護と法脈の継承

第二、国家との従属関係の清算と経済的な自立

第三、性理学に対する思想的な対応

第四、仏教の教化活動

第五、国家と社会への参加を通じた仏教の存在の認定

である。

2. 法脈守護と教団の回生のための自活の試み

法統の守護と法脈の継承

山中僧団以後、朝鮮仏教のもっとも至急な問題は、すでに失いつつある教の脈と禅家の法統をつなぐ法脈の継承と法統の守護作業であった。それで、文禄慶長の役を前後にして、西山大師の休静によって新たに山僧家統が樹立された。

その後、この法統が門下と法孫へと続き、朝鮮の中・後期の山中僧団は新たな興盛期を迎えた。

自立経済の基盤拡充

朝鮮の仏教における経済的な基盤は高麗時代と同様、寺院の莫大な土地と農場経営およ

び交易で多くの富を蓄積した寺院が少なくなかったが、太宗の代にいたっては、寺院の土地および奴婢の減縮と寺院の財産の国庫帰属などにより、寺院の自立経済基盤は徐々に崩れ始め、中宗の代になっては仏教の経済的な基盤が完全に解体された。

こうした仏教制度の撤廃と、経済的な基盤の解体といった抑仏政策は、根本的には仏教教団が国家に従属されていることから引き起こされたのであった。すなわち、国師・王師制度をはじめ、僧科・僧職・僧録司などの様々な仏教制度の設置と、寺院に対する土地および奴婢の給料などを通して、仏教は特に高麗時代から国家の従属が深化した。そうしたことが今や朝鮮時代になってからは、支配理念の交代に伴い、制度的・経済的な解体といった逆の過程を踏むようになったという意味である。

困難になった寺院の経済を打開するために、寺院では製紙作業をしたり、山菜や果物を栽培して売買したりもしたが、寺院経済の改善には至らなかった。

しかし、大きく関心を集めたのは、寺院の多様な「契」組織が活性化され、寺院経済に一助するようになったことで、朝鮮後期に寺院を中心に組織された「契」は「甲契」をはじめ、20種類以上もあった。⁽⁴⁾こうした寺院契は、信仰活動と仏事の経費をまかなうための一種の私設金融のような性格を帯びていた。これと類似した形の「契」は、新羅と高句麗時代にも見られるが、新羅時代の「功德宝」「占察宝」、また高句麗時代の「仏宝」「広学宝」などといった様々な宝があった。

こうした契員組織の活動状況は泗溟堂惟政の甲会文をはじめ、英祖8年(1732年)の玄風瑜伽寺の記録、正祖8年の雙溪寺・梵魚寺・通度寺の補寺碑を通して確認することができる。

このような寺院契が寺院の経済自立の基盤拡充に至大なる貢献をしたが、特に「甲契」の役割が非常に多かった。

朝鮮王朝の抑仏政策にもかかわらず、仏教の自立経済基盤を助成しようとする努力は、朝鮮の仏教教団が国家の従属から脱し、自律のための新たな道を開くための一つのきっかけとなったのである。

性理学への思想的な対応

萎縮された朝鮮の仏教が性理学の排仏理念に対応する本格的な思想活動はなかったものの、護法という立場での努力はあった。

世宗代の名僧であった涵虚の著述である「顕正論」を見ると、排仏の性理学的な邪論を論破し、仏教の真意を明らかにしようとした意思を感じ取ることができる。

しかし、「顕正論」の全体的な趣旨は、仏教と儒教の共通性と融合に集約される。⁽⁵⁾また、朝鮮時代初期の作者未詳の儒釋質疑論でも、19項目の質疑応答の形式をもって、

排仏論に対応して仏教の真面目を説破しているが、これもやはり儒・仏・道教の独自性と帰一性、特に儒・仏の共通性に関する論議が大きな割合を占めている。

こうした二つの著述の内容を総合してみると、結局、仏教と儒教とは、その形式と論理において異なる点があるものの、究極的な原理は相通じるという点を強調することで、儒・仏融合の立場を明らかにしている。

こうした儒・仏の共通性と融合の論理は明宗代の僧侶である普愚の「一正論」でも見られており、休静の著述でも垣間見ることができる。

朝鮮前期の最後の興仏を試みた主役であり、それだけに儒教側から厳しい非難を一身に受けた普愚は、仏教と儒教の共通性と融合の要素を「一正」の概念で整理している。すなわち、宇宙の根本としての「一理」と人間の根本である「心(正)」は、名称は異なるが、意味は同じであるというのが「一正説」の論旨である。簡略に整理されている普愚の「一正説」は、体系化された理論であるとは言いがたい。しかし、性理学の天人合一の思想と利気論を仏教の立場で「一正」の論理で展開し、その総合と融合を模索しているのは、確かに性理学に対する彼の独創的な対応である言えよう。

一方、国家の排仏政策および性理学に対し、仏教側から強固な抗疏をもって対応論理を広げた事例もある。

顯宗2年(1661年)、尼僧の居住地である仁壽・慈悲の両院の撤廃など、朝廷の仏教沙汰の決定をきっかけに白谷が上げた「諫廢釋教疏」がそれである。この長文の疏は、国家の排仏に対し、整然たる論理でその不当性を指摘し、是正を促すのはもちろん、性理学に対しても今までは異なる堂々たる態度を見せている。

白谷は仏教と儒教の二つの思想が真理性において相通じることにに関してあえて否定しなかったものの、その深さと愉悅において儒教は仏教に比べて浅劣であると直に説いている。

500年間にわたった朝鮮時代の排仏史の中で、このように堂々と仏教の立場と見解を明らかにした唯一の抗疏であると評価されるこの諫廢釋教疏が可能だった背景は何であっただろうか。それは、その後、八道禪教都總撰に任命されるほどの白谷自身の人格の他にも、丁卯・丙子胡亂以降、仏教に対する認識が改められ、僧侶の地位がある程度上昇したことと関係があると思われる。

すなわち、仏教教団が国家と社会に寄与することで、力を成長させたのを背景に、白谷がそのような強力な抗疏ができたと思われる。

仏教と儒教の共通性と融合を試みた穏健な立場であれ、「諫疏」のような強固な論理であれ、それは当時の国家や性理学者にどれほど肯定的に受け入れられたかは論証しにくい。しかしながら、性理学の理念のもとで、儒教国家においてこうした思想的な対応はいずれ

にせよ朝鮮時代の仏教信者たちによる護法の意志の発露であったことは確かである。

3. 大衆化の信仰形態

朝鮮王朝は、個人の信仰の欲求と仏教の教化のための活動に至るまで国家が直接統制し、介入する抑仏政策を行った。

しかし、こうした状況の中でも、仏教の教化のための努力は決して弱まったとは思えない。⁽⁶⁾

太祖は、釋王寺、太古寺、海印寺などに碑板を下賜し、世宗は「月印千江之曲」を直接作り、釈迦の功德を称え、世祖の時には刊經都監を設置して仏書を刊行した。朝鮮時代中、後期には各地方の寺院を中心に信徒の財施によって、民衆の信仰を反映する各種の仏書が絶え間なく刊行されたが、これは仏教の大衆化と生活化に大きく寄与するきっかけとなった。

この時期の仏教の信仰形態は、主に阿彌陀念仏を通して、死後の往生を期待する浄土信仰、教義よりは真言・陀羅尼のような呪文を唱えることで、祈福と治病を求める密教信仰、将来の救済者としての弥勒信仰などが発達した。

4. 仏教の貧民救済活動と民衆化の努力

国家の排仏政策にもかかわらず、朝鮮の仏教は先駆者的な民衆福祉活動を通して民衆に近づこうと努力した。太宗6年(1406年)、海宣は当時ほとんどわらぶき屋根であった新都の漢陽にあった民家の屋根を瓦に変える作業を朝廷に建議し、朝廷から支援を受けてその半分を変えたという記録が朝鮮実録に記録されている。

また、貧民救済と医療活動も持続させたが、世宗の時に華嚴宗の僧侶坦宣は当時蔓延した伝染病の退治において力を注ぎ、国家的な民衆医療事業に尽力して名を高めた。

5. 義僧軍の救国活動

文祿・慶長の役中、義僧軍の救国活動は現実参加という護国仏教の意味を持つ。さらに、こうした現実参加を通して仏教教団の存立と維持に大きな力を得ることができた。それだけでなく、丁卯・丙子胡乱の時に大いに活躍し、山城の築造にも多く僧侶が参加した。

義僧軍が全国的な組織力を持つようになった動機は、戦争中、宣祖の要請によって、休静が八道十六宗都総撰に任命され、全ての義僧軍を管掌するようになったことである。

文禄・慶長の役中活動をした軍僧の中で、誰より泗溟大師を例にあげられる。泗溟大師の軍組織と一揆ができる思想はどこにあったか、彼が叙述した「仏伝」8巻76-91頁には次のように記されている。

「如来がこの世にいらっしゃったのは元来衆生を救うためです。この盗賊らは性格が荒くて、やたらに殺すのではないかと恐ろしい。ぼくが行って荒れ狂った盗賊を諭して危ない武器を使わないようにさせよう。慈悲の教えを裏切ることにはできないのだから。(7)」

上記から分かるように泗溟大師は不義から百姓を救うのが仏教の基本精神で、釈迦の慈悲にあると思って軍人を組織して戦争に参加した。当時戦争に参加するのは僧には禁止されていたし、朝廷の王も否定的で考えていたのに、泗溟大師は王に上奏して次のように述べている。

「宣祖が西まで避難する後、義で一揆する僧らに向かって、『僕らが国に生まれて今までのんびりしていったのは皆王様のおかげです。しかしこんな危うい時に我慢できるのか。』

ぼくの年はもう51歳です。過ぎた年が皆聖明のおかげで、敢えて山奥の僧だっただけでも忘れられるか・・・ぼくは元々鹿といっしょに暮らしている者で兵家のことはぜんぜん分かりません。しかしただ一人の敵でも殺して聖上の恩返ししたいんです。』と言った。(8)」

上記は戦争がはじまって1年後朝鮮が日本人に奪われた時、僧でありながら国を救おうとする絶薄な心情から出る言葉だった。彼の思想は一忠君の思想であり、戦場に参加して、衆生の惨めさへ同情したものと理解できるが、現実から逃げた儒教思想を打ち破ろうとするものであった。(9)

6. 朝鮮の仏教の新しい修行僧団としての発展と意味

朝鮮の仏教が国家の寺院経済の抑制と各宗団の強制的な縮小・廃合および士林勢力の排仏示威で、都城での根拠地が完全に失われ、山中に入らざるを得なかった現実の中で生き残るための方法を模索せざるを得なくなったが、それが「山中仏教」という今までとは異なる新しい形態の仏教文化を生み出すようになった。

こうした山中仏教は、今までの仏教が国家機関として帰属されたことによる政教癒着から脱皮するきっかけとなっただけでなく、「山間叢林」の運営を通してはじめて純粋な修行僧団として変貌するといった肯定的な意味を持つようになったと言える。

このことと関連して、高麗中期の知訥(1158-1210年)が、停滞した禅法の復興と仏教界の新たな刷新のために、「名利を捨て、山林に隠遁し、一緒に禅仏・伝経し、運力しながら習定均慧に励むよう」と、力説したことを思い起こす必要がある。

周知のように、この時代の高麗の仏教界は、貴族文閥勢力と密着した僧侶らが宗派的な利益を図ったり、拳句の果てに反武臣抗争まで行うなど、修行の気風が乱れ、世俗化の現象が蔓延していた。

知訥はそうした仏教界を辛辣に批判しながら、修行を本業とする山間叢林の仏教を提唱し、それがそのまま高麗中期以降、禅法を大きく奮い起こした定慧結社の運動となった。

朝鮮時代の山中僧団を知訥のこうした定慧結社にそのまま置き換えることはできない。しかし、山中僧団がたとえ他意によって仕方なくなされた側面があるとしても、これをきっかけに朝鮮の仏教は純粋な修行僧団として生まれ変わるきっかけになったことは確かである。何よりも無宗の山中僧団から法統と法脈を継承し、禅仏教的なアイデンティティを確立していく過程は非常に意味深いものである。

朝鮮時代の排仏の歴史的な原因は、すでに古代仏教からの過度な政教密着から育まれており、それが朝鮮時代の排仏という形で現れたのである。こうした歴史の因果関係の中で、朝鮮の仏教が時代の現実を克服するために傾けてきた自らを救うための努力と活動に関しては、より十分に理解し、積極的に評価する必要がある。排仏の受難を経験しながら、停滞と衰退を重ねてきた仏教といった朝鮮の仏教に対する一般的な認識が、この時代の仏教の全体像ではないからである。

国家の政策的な抑圧と、排斥のもとで広げられてきた対内外的な様々な努力と活動は、それ自体朝鮮の仏教が自ら選んだ自活のための最善の方法であり、仏教の教団を最後まで維持させることができた底力もまさにそうした努力から生まれたのである。自らを救うための努力と活動の結果が朝鮮の仏教の維持と存続といった形で現れたのだが、その結果に関しては、この時代の仏教の新しい在り方を通してより具体的に意味を把握することができる。

その中でも特に、

山間叢林仏教としての純粋な修行僧団としての面貌

疲弊した経済環境の中での自立経済基盤の構築活動を通して得られた仏教教団の自律性

民衆との紐帯と結束がもたらす真の意味での民衆仏教時代の開幕

などは大きく注目すべき内容である。

こうした在り方とその意味は朝鮮の仏教に対する認識を新たにするのに十分であると言えよう。

こうした観点から、朝鮮の仏教は歴史的な果報の重い現実条件との対等を通して、新しい仏教の展開のために、意思と力量をすべて終結させていった、積極的で能動的な仏教として再評価されてもよいと思われる。

7. 韓国仏教の開化教育と平和思想

朝鮮の排仏政策に続き、日本植民地時代における韓国の仏教の萎縮にもかかわらず、韓国仏教は慈悲と平等文化と伝統、国権の守護精神および民衆を教化させる中心思想として発展してきた。

韓国の仏教は開化期には、封建的な残りを清算し、仏教指導者たちに近代意識を植える先駆者的な役割を主導的に行った。開化僧として広く知られた李東仁(1849-1881年)僧侶が代表的な人物である。

李東仁僧侶は高宗に世界の情勢を上奏し、1881年、紳士遊覧団が訪日した際に参謀役を果たした。⁽¹⁰⁾また、講学活動を広げた奉元寺の講院(寺の教育機関)では、僧侶はもちろん、開化の人士らに近代意識と学問を教える開化の場所として活用された。仏教界の近代教育機関としては、中央に明進学校(現在の東国大)をはじめ、7つがあり、全国の各地方に明化学校など、20箇所があった。

このように、仏教教育運動は、「私立学校令」で多くの私立学校が閉校される中でも、10の普通学校と、10の地方学林の認可を受けるなど、普通学校と中学校中央学林と連携される3段階の教育制度を確立するといった成果とともに、救国的な民族教育の発展の土台を作り上げるようにした。

近代韓国仏教の中興のために、大覺教を創設し、新しい仏教運動を引き起こした白龍城(1864-1940年)僧侶の活躍も高く評価される。⁽¹¹⁾

白龍城僧侶は、仏教の大衆化のために、儀式を簡素化し、民衆のための禅会、子供に対する布教のための日曜法会をはじめ、最初に讚仏歌を法会に導入するなど、従来の布教方式から脱皮し、禅農仏教と布教の現代化を試みた。

韓国仏教は、時代的に困難な環境の中でも、こうした民衆教化事業と法脈の伝統継承に力を尽くしてきた。朝鮮戦争後も、世界の人々に向けて仏教思想を広げることも怠らなかった。

仏法の世界布教にもっとも活躍をした方は崇山(1927年-)僧侶で、30年以上、全世界

を回りながら、釈迦の教えを伝えた。1966年、日本の弘法院をはじめとして、香港・米国・ヨーロッパなど、全世界の30カ国にわたって、120余の弘法院と仏教禅院を建て、仏教の開拓のため先頭に立った。

分断の現実の中で、冷戦の終息のための、平和思想運動も持続的に広げてきた。

1988年、仏教界の代表的な社会運動団体である「浄土会」⁽¹²⁾を創立し、北朝鮮援助団体である社団法人「良い友ら」、国際飢餓・疾病・文盲と取り組む機関である「JTS(Joint Together Society)」、仏教環境教育院などの参加機関を設立し、活動を繰り広げている法輪(1953年-)が代表的な僧侶である。法輪僧侶の平和実践運動は、2000年、マクサイサイ賞を受賞するきっかけにもなった。

その他に、実践僧家会・仏教齊家連帯・平和仏教協会など、多くの仏教団体から戦争反対と平和実現のための連帯機構を設立し、国際的な反戦平和運動と難民援助のための救済活動を進めている。それだけでなく、釈迦の不殺生の基本精神を環境運動に昇華させ、現代文明の産物である公害と汚染によって死んでいく自然の生命を生き返らせるための広範囲にわたる生命運動が展開されている。

このように、韓国仏教は朝鮮の仏教以来、法脈の継承作業とともに、現代になってからは世界平和運動を通じた参加仏教思想への発展してきたのである。

法然院の平和共存思想

法然院の基本思想は、平和と相生のヒューマニズム、そして命に対する愛にある。今、この時代は、人間の貪欲と物質主義により、愛よりは憎しみが先立ち、理解よりは憤りを、譲り合うよりは独善を優先する社会現象が生じている。

こうした物質価値本位時代は、人間個人をさらに孤立させ、自我の混乱と生命を軽視する風潮につながる。

今、世界は国別に貧困の差がさらに広がり、アフリカの場合は、毎日数千人が飢え死にしても、もう一方では穀物が余り、物の浪費が依然と続いているが、これは利己的な文明に慣れてしまった人間の傲慢と精神的な疲弊によるものである。また、民族的・宗教的な葛藤などの理由で、数十年間、隣国同士で戦争を繰り返し、罪のない命を殺すといった行為が毎日のように行われている。

法然院はこうした人間社会を癒し、平和と相生の社会を開いていく道は、無条件の慈悲の無限の実践のみであることを諭す。

また、法然院は、今生きている人々の救いだけでなく、すでに苦しみの中でなくなった罪のない魂に対しても、霊的な平和と安息のために引き続き努力を傾けている。

今まで、法然院は戦争と大規模の事故などで苦しみのうちになくなった魂のための天道大祭だけでも数十回行っており、これは韓国だけでなく全世界の人々を対象に進められてきた。

1964年から1975年までの10余年間、ベトナム戦争で韓国の軍人が約5000人戦死しており、法然院はこの戦死者の魂を慰めるための無布施の天道大祭を釜山本院で、釜山市長・国防長官・軍の将星などが大勢出席した中で、1988年5月に厳粛に行われた。

また、1990年の湾岸戦争および2001年のアフガニスタン戦争、2003年のイラク戦争で死亡した数万人の無名の外国人戦死者のための特別な天道祭を、1991年と2002年、2003年にそれぞれ釜山とソウルの本院で開催した。

法然院のこうした行事は、世界各国に対して、戦争を中断するよう促し、平和と慈悲の真の意味を広く知らせるためである。

2001年2月26日に、日本植民地時代、日本の長生炭鉱で水死された韓国人犠牲者136人の帰国および位法安式を、釜山市民と国会議員ら約4000人が参加した中で、釜山駅の広場で執り行い、同じ年の9月、慶州の法然院では、第二次世界大戦当時、日本軍の強制慰安婦の活動をしながら死亡した挺身隊の女性たちに対する平和と安息のための天道祭を、法然院の家族および生存している挺身隊の女性たちの参加で執り行った。⁽¹³⁾このように、法然寺では、年10回以上平和運動のため慰霊祭を行っているのである。

その中から、長生炭鉱犠牲者の経緯を少し述べたい。長生炭鉱は1942年2月3日山口県吉敷郡西岐波村（同年宇都市に合併）早朝6時、長生炭鉱は坑内現場事務所より150mばかり離れた五段炭層より異常出水が始まり、同日午前8時頃水没した。太平洋戦争開始直後で、シンガポール陥落直前のことで、この水没事故は一切報道されることはなかった。長生炭鉱（通称「朝鮮炭鉱」）の創業は1933年といわれているが、今残されている写真の書き込みから見れば1932年年初には既に創業に着手していたものと思われる。

上記「朝鮮炭鉱」では一般坑内の殆どが朝鮮人であったといわれており、また1933年撮影の写真に朝鮮服の女性と思われる人物が既に写っていることから、この炭鉱が最初から朝鮮半島と深い係わりを持っていたものと思われる。

同鉱は、大陸の戦線拡大と歩調を合わすかのように、急成長を遂げ、1940年には15万トンの出炭量と992人の従業員を持つ、宇部炭田有数の炭鉱に育ち、1942年の水没事故当時は電車坑道と呼ばれる水平坑道を持っていた。利益率日本一になったこともあったといわれている。

1939年より始まった募集形式による朝鮮半島（特に慶尚北道、南道）からの朝鮮人労働者を1941年6月迄に1258人雇入れていた。（中央協和会）逃亡者もかなりあったようである。

1942年2月3日朝、かなり前から海水の浸出が見られていた五段坑は大出しの度ごとに、キコを組んで閉塞されている本来採掘するはずのない坑の石炭を炭質が良いために、無理に採掘を続け、遂に大事に至ったのである。

この炭鉱は、本鉱のすぐ近くに新浦炭鉱という炭鉱が以前あり、大正10年12月30日水没

のため、34名の死者を出している。日本人坑夫は、その間の事情を承知しており、そのために朝鮮人労働者を集めたともいわれている。この事故に至るまで、何度と無く水没したとの誤報で坑内夫が坑口まで駆け上がって来ては叱られるということを繰り返していたという。この水没事故の犠牲者は183名といわれているが、大日本報国会の「殉職産業名簿」には180名になっている。しかしながら、事故の3、4日後に書かれた西光寺の白木の位牌は187名分ある。特に朝鮮人殉職者は、1940年の創氏改名と一夜に書かれたという位牌の誤記載により本名の確定が困難な人物もある。「殉職産業人名簿」からは133名、位牌からは139名が朝鮮人（日本人は48名）と思われる。この人数の差異については、現状では正確に判断すべき資料に欠ける。1990年7月7日、毎日新聞が千葉で「集団渡航鮮人有付記録」の発見を告げた。早速新聞社を通じて、資料を取り寄せ453名の記録により犠牲者名の補強を行った。⁽¹⁴⁾（「長生炭鉱の‘水非常’を歴史に刻む会」パンフレット参照）

今現地に在る遺跡は地上部が破壊され、海上のピーヤ（排気坑）のみが残されている。私達は現在その保存運動を行っている。また、1982年に長生炭鉱の関係者が中心になって殉難者の碑が建立されている。ところがこの碑は多数の朝鮮人が海底深く眠っていることも、強制連行されてきたことも一言も触れられておらず、ただ忘れさられようとしている。関係者は朝鮮人、韓国人に対して日本人が36年間行ってきた植民地支配と数々の所行を認めることができないでいる。

「長生炭鉱の‘水非常’を歴史に刻む会」はその謝罪を含めて、事故の姿を後生に残すこと、証言を集めることなどを現在進めている。ピーヤの保存も同時に進めており、山口県知事、宇部市長へ署名簿を添えて要請した。ピーヤの所有者にも保存の要請をすることになっている。

このように、法然院は死者の魂に対する平和と慈悲の実践が決して生きている人々に劣らないという認識を持って、引き続き無布施の天道祭を執り行っており、この天道祭の基本精神は法然院の無条件の慈悲と平和共存哲学から始まる。

法然院は、大衆により深く接近する生活宗教として、いつも人々の不安と呻きの声に耳を傾けており、一方では公害と人間の愚かさによって死んでいく自然を救うための役割も果たしている。私たちは自ら悟らない限り、慈悲の大きな意味を知ることができず、知恵の深い泉に出会うことなく、苦しみに満ちた人生を送るであろう。法然院はまさにこうした人間個々人の真我を悟らせ、共に慈悲の志を立て、知恵の喜びを分かち合うのである。

8 . 結論

朝鮮仏教を時代別でまとめるならば、まず古代仏教は仏教受容とともに護国思想が強い。中世仏教は朝廷で政治と密着して権力の中心として成長してきたが、近世社会になってからは山奥の修道仏教に変化した。その後 日韓合併という暗い時代に再度日本勢力に押し除けられて、民族宗教として成長しなければならなかった。一部の仏教指導者たちは親日派になったが、また、一部の朝鮮仏教の指導者は民族宗教反日派に転換した。解放以後反日派は軍事独裁の下に平和運動を展開して、今日イラク戦争で派兵に反対する運動を展開している。この中で、大韓仏教宗団法然寺も国内平和と世界平和のために40余りの寺において平和運動を展開している。

注

- (1) 高麗、朝鮮時代僧侶の対相として国家試験であり、合格者は国家に努めることがある。
- (2) 元暁 他(李笑永 譯)『韓国仏教思想』三成出版 1990年、23頁
- (3) 金鐘鳴 『仏教の実相と歴史・下巻』新東亜出版 1996年、179頁
- (4) 新羅時代に、金庾信の溟福をお祈るため設置した利息機関である。『三國史記』『高麗記』に記されている。
- (5) 宋錫球 『韓国の儒仏思想』思想研新書 1985年、358-359頁
- (6) 金チヨルチヨン 『韓国仏教思想概観』韓国言論資料刊行会 1997年、334頁
- (7) 四溟大師記念事業會 『四溟堂大師集』 第7巻
「如來出世 元爲救護衆生 此賊張甚 恐 殘害 吾當往諭狂賊 殺戰凶鋒 則庶不負慈悲教也」
- (8) 「 宣廟西幸 抗義慷慨 語諸僧曰 我等生居國土 息食優游 閱有年紀者 秋豪階上力也 值此 危其忍坐視」「臣年今己五十一 過去歲月 階是聖明之澤 敢以緇類自外 忘君父於一飯之頃哉(中略) 臣本以矩鹿之身 不識兵家之事 然而欲殺一賊 以報聖上罔極之恩 則豈有下於衣冠哉」
- (9) チェ サン ショ 『泗溟堂の仏教思想と護国観』、『泗溟大師と護国仏教の理念』泗溟大師研究 叢書刊行委員會 2000年11月、98-99頁
- (10) 佛教新聞社編 『韓國佛教人物思想史』民族社 1990年、393-395頁
- (11) 佛教新聞社編 『韓國佛教人物思想史』民族社 1990年、421-425頁
- (12) <http://www.jungto.org>
- (13) 「日帝強制徴用長生炭鋳犠牲英靈還國奉安および薦度制」(2000年3月1日パンフレット)を参照
- (14) 金文吉 『日帝強制徴用長生炭鋳』進永出版社 1998年、70-80頁

参考文献

- 田村円澄 『日本仏教史』 4巻（百済、新羅）法蔵館 1983年
- 李喜秀 『土着化過程から見る韓国仏教』 仏書普及 1971年
- 孫承喆 『朝鮮時代韓日関係研究』 知性人の泉 1994年
- 鄭珖鎬 『近代韓日仏教関係史研究 日本の植民地政策と関連して一』 仁荷大学校出版部 1994年
- 韓哲議 『日本の朝鮮支配と宗教政策』 未来社 1988年
- 朴性鳳 「雲の独立思想研究」(慶熙大学校教育大学院 修士論文) 1985年
- 李仁榮 「任辰倭亂前後の対外関係」、『新天地』 第3巻 10号 1948年
- 朴種和 「泗溟大師」、『白性有博士記念 仏教論文集』 1957年
- 田村円澄 「百済救援考」、『熊本大学 文学部論叢 第5号 史学編』 熊本大学文学会 1981年
- 權相老 『朝鮮仏教略史』 祈交館 1917年
- 「泗溟大師と護国仏教」 泗溟大師研究論集 刊行委員会 2000年
- 李龍和 『朝鮮仏教通史』 示城 1918年
- 金文吉 『伽耶史史料筆成』 伽耶史史的開發研究所 2000年
- 金文吉 『強制徴用と長生炭鉱』 述文社 2000年

(ほう・ゆう 大韓仏教・法然寺住職、京都大学文学部外国人共同研究者)

